

幼稚園教育要領と小学校学習指導要領における「動詞」の検討

Verbal Characteristics of the Course of Study for Kindergarten and the Course of Study for Elementary Schools: A Text Mining Analysis

勢井 香菜子*, 湯地 宏樹**

*〒772-8502 鳴門市鳴門町高島字中島 748 番地 鳴門教育大学大学院

**〒772-8502 鳴門市鳴門町高島字中島 748 番地 鳴門教育大学 学校教育研究科

SEI Kanako* and YUJI Hiroki**

*Naruto University of Education, Graduate School

748Nakajima, Naruto-cho, Naruto-shi,772-8502, Japan

**Naruto University of Education

748Nakajima, Naruto-cho, Naruto-shi,772-8502, Japan

抄録：幼稚園教育要領と小学校学習指導要領における「動詞」に焦点を当て、その特徴を KH Coder によるテキストマイニング分析によって明らかにすることを目的とする。分析の結果、幼稚園教育要領は「味わう」「気付く」などが特徴であるのに対して、小学校学習指導要領は、「付ける」「できる」の出現頻度が高いことが明らかになった。幼稚園教育要領は自動詞の出現頻度が高く、自動詞「なる」も小学校学習指導要領より出現頻度が高かった。「児童・幼児」「教師」の主語や「と／との」や「の」の助詞も幼稚園教育要領の方が小学校学習指導要領より出現頻度が高かった。これらの結果は、指導案や日誌などの記録にも応用できると思われる。今後は、保育事例における「動詞」についても検討していきたい。

キーワード：幼稚園教育要領, 小学校学習指導要領, 動詞, 自動詞／他動詞, テキストマイニング

Abstract: This study focuses on the "verbs" in the Course of Study for Kindergarten and the Course of Study for Elementary Schools, aiming to elucidate their characteristics through text mining analysis using KH Coder. As a result, the Course of Study for Kindergarten is characterized by the frequent occurrence of verbs such as "savor" and "notice," while the Course of Study for Elementary Schools reveals a high frequency of verbs like "attach" and "can." The Course of Study for Kindergarten exhibits a higher frequency of intransitive verbs, and the intransitive verb "become" is more frequent than in the Course of Study for Elementary Schools. Subjects such as "children," "infants," and "teachers," as well as particles like "with," and "of," also have a higher frequency in the Course of Study for Kindergarten compared to the Course of Study for Elementary Schools. These research findings are expected to be applicable to records such as teaching plans and journals. In the future, we will investigate the "verbs" in childcare cases.

Keywords: Course of Study for Kindergarten, Course of Study for Elementary Schools, elementary school curriculum guidelines, verbs, intransitive/transitive verbs, text mining.

I 研究の目的

本研究は、2017年3月に改訂された幼稚園教育要領と小学校学習指導要領の「動詞」に焦点を当て、その特徴をテキストマイニング分析によって明らかにすることを目的とする。なぜ幼稚園教育要領と小学校学習指導要領の「動詞」を比較検討するのかの理由は次のとおりである。

まず2017年改訂の特徴のひとつに幼児教育と小学校教育の連続性が図られたということにある。幼稚園教育要領にも「育みたい資質・能力」として「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」が示され、小学校以降の学校教育との整合性が図られた。ただし、幼稚園教育要領は「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」と「基礎」となっている。

幼稚園教育要領には「幼稚園教育において育まれた資質・能力を踏まえ、小学校教育が円滑に行われるよう、小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会などを設け、『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』を共有するなど連携を図り、幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続を図るよう努めるものとする」とある。小学校学習指導要領にも「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた指導を工夫することにより、幼稚園教育要領等に基づく幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえて教育活動を実施し、児童が主体的に自己を発揮しながら学びに向かうことが可能となるようにすること」とある。このように「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共通の言葉として連携・接続が求められている。

しかし、幼稚園教育要領と小学校学習指導要領の共通性が図られたといえ、全体の構成や文言等の違いは明らかである。例えば、幼稚園教育要領第2章に示すねらいは、「幼稚園教育において育みたい資質・能力を幼児の生活する姿から捉えたもの」と「心情、意欲、態度など」から「育みたい資質・能力」になったが、各領域の「ねらい」は、「(1) 明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わう」「(2) 自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする」「(3) 健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身に付け、見通しをもって行動する」(下線は筆者。改訂された箇所を示す)と旧幼稚園教育要領(2008年)とほぼ変わっておらず、(1)心情、(2)意欲、(3)態度に対応している。それに対して、小学校学習指導要領の「国語」の目標は、「(1) 日常生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うことができるようにする」「(2) 日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う」「(3) 言葉がもつよさを認識するとともに、言語感覚を養い、国語の大切さを自覚し、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う」(1) 知識及び技能、(2) 思考力、判断力、表現力等、(3) 学びに向かう力、人間性等と資質・能力に対応している。国語以外の教科も同じである。

では、幼稚園教育要領には資質・能力の3つの柱がどこに記載されているのかというと、それは「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」である。例えば「思考力の芽生え」には「身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる」とある。「物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたり」は「知識及び技能の基礎」、「考えたり、予想したり、工夫したりするなど」は「思考力、判断力、表現力等の基礎」、「多様な関わりを楽しむようになる」は「学びに向かう力、人間性等」となっている。

このように小学校学習指導要領は「目標」は資質・能力で整理されたが、幼稚園教育要領の「ねらい」は「心情、意欲、態度など」のままである。小学校の授業では、黒板

に「めあて」と書く。その「めあて」の主語は児童である。しかし、幼児教育では「めあて」とはあまり言わない。保育者の「ねらい」は「環境を通して行う」保育に埋め込まれているといえる。だからと言って、小学校学習指導要領は児童中心で、幼稚園教育要領は教師中心に書かれたものではない。

主語について考えると、能動態、受動態という関係が例として考えられる。例えば、「教師が子どもを教育する」は、教師が主語(主体)で、子どもは目的語(客体)である。この文の主語を子どもに変えると「子どもが教師に教育される」と受動態になり、強制感が強くなる。

「遊ぶ」を動詞とした場合はどうだろうか。上記に倣えば「教師が子どもを遊ばせる」となり、その受動態は「子どもが教師に遊ばされる」となる。どちらも保育にふさわしいと感じられないのは、「遊ぶ」が自動詞だからである。本来、自由で自発的な活動である「遊び」を手段としたり、統制したりしようとする不自然になる。「保育する」のような他動詞は、目的語がないと意味が完結しない。

同様に「育てる」「教える」「教育する」などはすべて他動詞であり、「(幼児、児童)を」と対象や目的が必要である。それに対して「育つ」は自動詞で対象や目的を必要としない。「遊ぶ」「育つ」などの自動詞の特徴は、主体の動きや変化を意味し、他に動作・作用を及ぼさないということである。したがって、幼児自身が自ら「遊ぶ」「育つ」ことを大切にする「環境を通して行う」保育は、他動詞や受動態に具わないのではないだろうか。

玉岡・張・牧岡(2003)は、毎日新聞のコーパスを使って、自動詞と他動詞の使頻度を比較したところ、未然形、連用形、終止形、仮定形、命令形および全活用の総使用頻度のすべてにおいて、自動詞と他動詞の使用頻度に有意な違いはなかったことを明らかにしている。中俣(2020)は、韻文、ブログ、ベストセラー、知恵袋、図書館・書籍などのレジスターは自動詞の割合が高く、法律、白書、広報誌、国会議事録など硬い文体ほど自動詞の使用率は少ないことを明らかにしている。

自動詞と他動詞と同様に、主語や対象の位置づけという点で、「中動態」の考え方も関連していると思われる。バンヴェニスト(2022)によると、中動態というのは「動詞は主語がその座となるような過程」である。すなわち、能動態/中動態の組み合わせにおける能動態は「動詞は主語から出発して、主語の外で完遂する過程」であり、中動態というのは「動詞は主語がその座となるような過程」を指し、そのとき「主語は過程の内部にある」ということになる(バンヴェニスト, 2022)。中動態が適している動詞には、「生まれる」「眠る」「想像する」「成長する」「欲する」「畏敬の念を抱く」「希望する」「見える」「聞こえる」「抱き合う」などがあるという(市川・井庭, 2022)。これらの動詞の中には自動詞も他動詞もあるので、必ずしも中動態=自

動詞ではないようである。

小学校学習指導要領における「動詞」に関する研究としては、池田・福田の一連の研究（2019；2020；2021）がある。小学校、中学校、高等学校の学習指導要領における目標と内容について検討を行っている。小学校、中学校、高等学校で比べて、「気付く」「つくる」「経験する」は小学校学習指導要領にしか出現しないことや、中学校では「認める」、高等学校では「発表する」という動詞が特徴的に挙げられ、個人から他者に向けたものへと意識が変容していく様子が明らかになっている。この研究は、教科（算数・数学、理科、社会、国語）を分析対象としているため、幼稚園教育要領は含まれていない。

幼稚園教育要領における先行研究としては、『幼稚園教育要領解説』における遊びに関する言説を分析した研究（児玉・楠本，2022）がある。館山・高橋（2021）は、テキストマイニング分析によって、小学校学習指導要領と幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領を比較し、幼小連携の観点から、小学校学習指導要領では、教師が児童へ主体的な行動を促す事（指導）に力点が置かれているのに対して、幼稚園教育要領では、園児が自然に感じた思いや行動を味わい、それを伝えることに注力していることを明らかにしている。本研究で取り扱う「する」「なる」「できる」については分析対象となっていない。

そこで、本研究は、以上を踏まえ、幼稚園教育要領と小学校学習指導要領における自動詞―他動詞、主語―述語について分析するために「動詞」に着目してみる。そして、テキストマイニング分析によって、幼稚園教育要領と小学校学習指導要領における「動詞」の特徴や頻度を分析し、幼稚園と小学校における違いを検討することを目的とする。

II 研究の方法

1. 分析対象

資料は、幼稚園教育要領（平成29年3月告示）及び小学校学習指導要領（平成29年3月告示）を対象とした。なお、国立教育政策研究所教育研究情報データベース「学習指導要領の一覧」（<https://erid.nier.go.jp/guideline.html>）からテキストデータを取得した。幼稚園教育要領及び小学校学習指導要領の一文ずつデータを Microsoft Excel によって作成した。前文は両者が共通しているため、分析からは除外した。また、卑弥呼（ひみこ）、聖徳太子（しょうとくたいし）、小野妹子（おののいもこ）などの読みも削除して用いた。

2. 分析方法

テキストマイニングの分析には、樋口（2020）が開発し

たフリー・ソフトウェア KH Coder (ver. 3.Beta.07f) を用いる。コンピュータを使用するので、データを要約・提示する際に「手作業」を省くことで、分析者のもつ理論や問題意識によるバイアスを明確に排除できる（樋口，2020）というメリットがある。

自動詞と他動詞については、ナロック・パルデシ・影山・赤瀬川（2015）の『現代語自他对一覧表 Excel 版』による。幼稚園教育要領及び小学校学習指導要領に出現した「動詞」421 語の中で、この一覧にないものは『広辞苑第六版』（岩波書店，2008）で一語ずつ調べた。ただし、「限る」「終わる」など自動詞と他動詞の両方あるものは含めていない。したがって、自動詞 108 語と他動詞 300 語となった。

コーディングルールを表 1 のとおり設定した。

表 1 仮説コード表

コード	関連語
児童・幼児主語	児童が／児童は／幼児は／幼児が
教師主語	教師が／教師は／教師は／教師が
を／に	児童を／幼児を／児童に／幼児に
と／との	児童と／幼児と／児童との／幼児との
の	児童の／幼児の

III 結果と考察

KH Coder によるテキストマイニングの分析の結果をみていく。総抽出語数（使用）：91,771（10,941）、異なり語数（使用）：3,063（397）、出現回数の平均 27.56（標準偏差 203.07）となった。

表 2 は幼稚園教育要領と小学校学習指導要領の特徴語のリストである。Jaccard 係数とは、抽出語やコンセプトの共起の強さを測るのに適した係数（樋口，2020）である。

幼稚園教育要領と小学校学習指導要領の全体的な特徴語の違いを見てみると、幼稚園教育要領において Jaccard 係数が高い上位 2 つは「幼児」「幼稚園」である。それに対して、小学校学習指導要領では「児童」「小学校」が特徴語にない。これにより、幼稚園教育要領では「幼児」「幼稚園」という言葉が多く使われているのに対し、小学校学習指導要領では「児童」「小学校」という言葉があまり使われていないということが分かる。また、小学校学習指導要領において「幼児」「幼稚園」の出現頻度を見てみると、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた指導を工夫することにより、幼稚園教育要領等に基づく幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえて教育活動を実施し、児童が主体的に自己を発揮しながら学びに向かうことが可能となるようにすること」などがあるが、小学校学習指導要領の文における出現頻度が「幼児」(0.51%)、「幼稚園」

(0.31%)と1%にも満たないのに対して、幼稚園教育要領は「幼児」(32.84%)、「幼稚園」(17.34%)である(表3)。

幼稚園教育要領は「生活」が3番目にJaccard係数が高い。小学校学習指導要領における「生活」の出現頻度は9.67%に対して、幼稚園教育要領は27.68%であった(表3)。

「教育」「自分」「様々」「味わう」「課程」「体験」「気付く」についても同様に、小学校学習指導要領よりも幼稚園教育要領の方が、出現頻度が高いことが示された。

小学校学習指導要領においてJaccard係数が高いのは、「活動」「指導」とともに「付ける」という「動詞」である。4番目に高い「身」とともに使われていることが多く、「数量や図形などについての基礎的・基本的な概念や性質などを理解するとともに、日常の事象を数理的に処理する技能を身に付けるようにする。」「数量の整理に関わる数学的活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。」のような形で使われている。小学校学習指導要領において「付ける」は17.16%であるのに対して幼稚園教育要領では3.69%、また「身」は小学校学習指導要領では16.27%であるが、幼稚園教育要領においては2.58%しか出現していないという結果であった(表3)。

表2 幼稚園教育要領と小学校学習指導要領の特徴的な語の一覧(数値はJaccard係数)

幼稚園教育要領		小学校学習指導要領	
幼児	.311	活動	.171
幼稚園	.168	<u>付ける</u>	.171
生活	.135	指導	.165
教育	.116	身	.162
自分	.091	内容	.131
様々	.089	表現	.120
<u>味わう</u>	.080	理解	.106
課程	.079	事項	.100
体験	.078	次	.100
<u>気付く</u>	.074	学年	.084

※下線は動詞。

表2の下線を引いた「動詞」の「味わう」「気付く」「付ける」について見てみよう。小学校学習指導要領における「味わう」の出現頻度は0.96%に対して、幼稚園教育要領は8.86%、「気付く」は小学校学習指導要領の出現頻度は2.26%に対して、幼稚園教育要領は9.23%であった(表3)。例示としては、「音楽表現を工夫することや、音楽を味わって聴くことができるようにする(小学校学習指導要領)」や「音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう(幼稚園教育要領)」、「言葉には、事物の内容を表す働きや、経験したことを伝える働きがあることに気付くことなどがある(小学校学習指導要領)」、「豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分か

ったり、できるようになったりする『知識及び技能の基礎』(幼稚園教育要領)」と幼稚園教育要領では「知識及び技能の基礎」として重要な動詞である。「付ける」は前述のとおりである。

表5は幼稚園教育要領と小学校学習指導要領における「動詞」について特徴語のリストである。「味わう」「気付く」「付ける」を含む。

表5 幼稚園教育要領と小学校学習指導要領の特徴的な「動詞」の一覧(数値はJaccard係数)

幼稚園教育要領		小学校学習指導要領	
味わう	.080	付ける	.171
気付く	.074	及ぶ	.058
行う	.072	図る	.048
踏まえる	.069	応じる	.047
関わる	.060	用いる	.043
楽しむ	.058	表す	.038
親しむ	.056	捉える	.033
基づく	.053	生かす	.033
育つ	.046	知る	.029
考える	.043	取り扱う	.025

図1は頻出数が50回以上の動詞の一覧である。ただし、この図では「する」の頻度3956は記載していない。2位以下で100以上の「動詞」は、「付ける」512、「できる」453、「考える」254、「行う」211、「及ぶ」186、「ある」180、「図る」165、「示す」161、「関わる」159。「応じる」154、「表す」148、「用いる」133、「養う」119、「なる」110、「捉える」106、「伝える」105、「生かす」102、「もつ」101の19語であった。

表6 幼稚園教育要領と小学校学習指導要領の動詞の比較

	する	なる	できる
小学校学習指導要領(2926)	1760 (60.15%)	74 (2.53%)	415 (14.18%)
幼稚園教育要領(271)	186 (68.63%)	32 (11.81%)	21 (7.75%)
合計(3197)	1946 (60.87%)	106 (3.32%)	436 (13.64%)
χ^2 値	7.144**	63.755**	8.180**

** $p < .01$

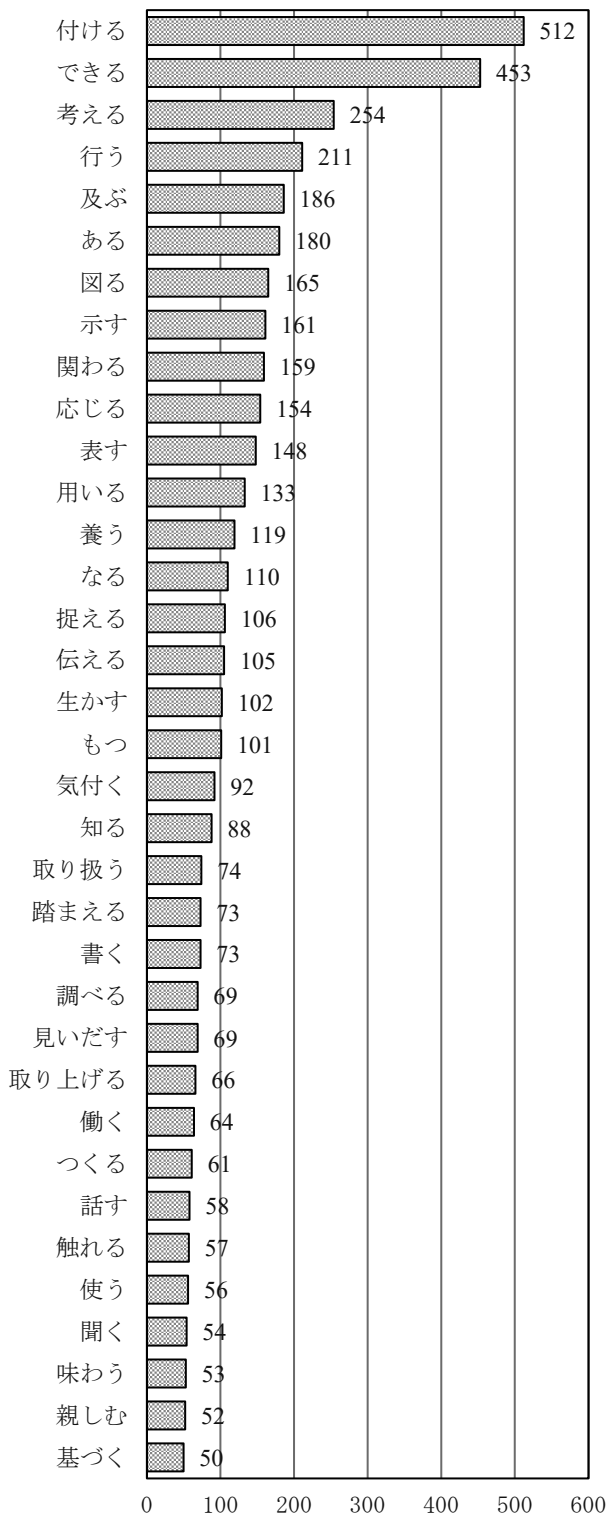


図1 幼稚園教育要領と小学校学習指導要領の頻出数 50以上の「動詞」

これらの頻出「動詞」のうち、「する」「なる」「できる」を取り上げる。ちなみに、「する」は他動詞、「なる」は自動詞である。池上（1981）は、＜する＞言語と＜なる＞言語について興味深い研究を行っている。日本語は「なる」言語であり、自動詞を好む（中俣，2020）と言われている。

「なる」については、幼稚園教育要領における「幼児期

の終わりまでに育てほしい姿」の文末がすべて「～ようになる」となっている。『幼稚園教育要領解説』（文部科学省，2018）によると『『幼児期の終わりまでに育てほしい姿』が到達すべき目標ではないことや、個別に取り出されて指導されるものではないことに十分留意する必要がある』からである。勝浦・戎（2003）は、保育は「する」ものではなく、「なる」ものだと主張している。「できる」は3番目に頻出数が多い動詞である。「単に何かを『できる』、『できない』ということのみが問題ではなく、あくまでも自分でやりたいことを意識し、自分が思ったことができたということを喜ぶ気持ちが大切である」（文部科学省，2018），幼児教育では「できる」「できない」ことを評価しない。

そこでこれら幼児教育において重要なワードである「する」「なる」「できる」について見てみると、 χ^2 検定の結果、「する」($\chi^2(2)=7.144$ $p < .01$)、「なる」($\chi^2(2)=63.755$ $p < .01$)、「できる」($\chi^2(2)=8.180$ $p < .05$)に有意差があるということが分かる（表6）。残差分析を行ったところ、「する」「なる」は幼稚園教育要領が小学校学習指導要領より有意に多く、「できる」については幼稚園教育要領が小学校学習指導要領より有意に少なかった（それぞれ $p < .05$ ）。すなわち、他動詞「する」と自動詞「なる」の違いはなく、いずれも幼稚園教育要領の出現頻度が高いことが明らかになった。しかし、「できる」に関しては、幼稚園教育要領に21（7.75%）の文に出現しているものの、小学校学習指導要領415（14.18%）の半分以下であった。

表7は幼稚園教育要領と小学校学習指導要領の自動詞と他動詞の比較である。ナロック・パルデン・影山・赤瀬川（2015）等の分類に基づき、幼稚園教育要領と小学校学習指導要領を χ^2 検定によって分析した結果、「自動詞」($\chi^2(2)=8.726$ $p < .01$)に有意差がみられた。「他動詞」の有意差は見られなかった。残差分析を行ったところ、「自動詞」は幼稚園教育要領が小学校学習指導要領より有意に多く、「他動詞」は差がなかった。

「自動詞」が使われている例示としては、「数の構成と表し方に関わる数学的活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する」「相手に伝わるように、理由や事例などを挙げながら、話の中心が明確になるよう話の構成を考えること」（小学校学習指導要領）や「幼稚園内外の行事において国旗に親しむ」「身近な物や遊具に興味をもって関わり、自分なりに比べたり、関連付けたりしながら考えたり、試したりして工夫して遊ぶ」（幼稚園教育要領）などが挙げられる。

表 7 幼稚園教育要領と小学校学習指導要領の自動詞と他動詞の比較

	自動詞	他動詞
小学校学習指導要領 (2926)	1213 (41.46%)	2299 (78.57%)
幼稚園教育要領 (271)	138 (50.92%)	217 (80.07%)
合計 (3197)	1351 (42.26%)	2509 (78.70%)
χ^2 値	8.726**	0.250

** $p < .01$

表 8 は幼稚園教育要領と小学校学習指導要領の主語の比較である。表 1 の仮説コード表に基づき、幼稚園教育要領と小学校学習指導要領を χ^2 検定によって分析した結果、「児童・幼児主語」($\chi^2(2)=76.414$ $p < .01$)、「教師主語」($\chi^2(2)=21.667$ $p < .01$) に有意差がみられた。残差分析を行ったところ、「児童・幼児主語」、すなわち「子ども主語」の場合、「教師主語」の場合、どちらの場合においても幼稚園教育要領が小学校学習指導要領より有意に多かった。すなわち、小学校学習指導要領に比べて幼稚園教育要領において「子ども」を主語とした場合のみならず、「教師」を主語とした場合も出現頻度が高いということが明らかになった。

表 8 幼稚園教育要領と小学校学習指導要領の主語の比較

	児童・幼児主語	教師主語
小学校学習指導要領 (2926)	52 (1.78%)	6 (0.21%)
幼稚園教育要領 (271)	29 (10.70%)	6 (2.21%)
合計 (3197)	81 (2.53%)	12 (0.38%)
χ^2 値	76.414**	21.667**

** $p < .01$

表 9 は幼稚園教育要領と小学校学習指導要領の「を／に」「と／との」「の」の助詞を比較した結果である。表 1 の仮説コード表に基づき、幼稚園教育要領と小学校学習指導要領を χ^2 検定によって分析した結果、「と／との」($\chi^2(2)=110.848$ $p < .01$)、「の」($\chi^2(2)=123.678$ $p < .01$) に有意差がみられた。残差分析を行ったところ、「と／との」「の」は幼稚園教育要領が小学校学習指導要領より有意に多く、「を／に」について有意差はなかった。すなわち、「を／に」という表現を使うことは幼稚園教育要領においても

小学校学習指導要領においても差はなく、「と／との」「の」という表現を使うことが小学校学習指導要領よりも幼稚園教育要領の方が多いことが分かった。

「と／との」「の」が使われている例示としては、「異なる学年の児童と協力し、創意工夫を生かしながら共通の興味・関心を追求すること」「(略) 組織的かつ計画的な取組を推進するとともに、学年や学校段階を越えて児童の学習の成果が円滑に接続されるように工夫すること」(小学校学習指導要領) や「このため教師は、幼児との信頼関係を十分に築き、(中略) 試行錯誤したり、考えたりするようになる幼児期の教育における見方・考え方を生かし、幼児と共によりよい教育環境を創造するように努めるものとする」「幼児の実態を踏まえながら、教師や他の幼児と共に遊びや生活の中で見通しをもったり、振り返ったりするよう工夫すること」(幼稚園教育要領) などが挙げられる。

表 9 幼稚園教育要領と小学校学習指導要領の助詞の比較

	を／に	と／との	の
小学校学習指導要領 (2926)	20 (0.68%)	3 (0.10%)	91 (3.11%)
幼稚園教育要領 (271)	5 (1.85%)	14 (5.17%)	48 (17.71%)
合計 (3197)	25 (0.78%)	17 (0.53%)	139 (4.35%)
χ^2 値	2.946	110.848**	123.678**

** $p < .01$

III まとめと今後の課題

KH Coder によるテキストマイニングの分析によって、幼稚園教育要領と小学校学習指導要領の「動詞」を比較した結果、幼稚園教育要領は「味わう」「気付く」が特徴付けられるのに対して、小学校学習指導要領は、「付ける」「できる」の出現頻度が高いことが明らかになった。幼稚園教育要領は自動詞の出現頻度が高く、自動詞「なる」も小学校学習指導要領より出現頻度が高かったが、他動詞「する」も高かった。「児童・幼児」「教師」の主語や「と／との」や「の」の助詞も幼稚園教育要領の方が小学校学習指導要領より出現頻度が高かった。

幼稚園教育要領と小学校学習指導要領の「動詞」を検討して得られた結果は、指導案や保育日誌などの記録にも応用できると思われる。

「味わう」「気付く」などは幼稚園教育要領にも「育みたい資質・能力」を特徴付けるキーワードである。「育みたい資質・能力」や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を知るためには、「動詞」に注目することも有効であろう。

幼稚園教育要領においては、「幼児期の終わりまでに育

ってほしい姿」の文末に示されている「なる」などの自動詞も重要である。

幼稚園教育要領においては、「幼児」だけでなく、「教師」の主語の出現頻度も高い。OECD Learning Compass 2030 において Co-Agency には友達，教師，地域社会が含まれる。「教師」の Agency も発揮されるからといって「教師が子どもを保育する」のでもなく「子どもが教師に保育される」のでもない。

井庭（2022）は，時代の変化を「3つのC」，すなわち，Consumption（消費社会），（Communication）情報社会，（Creation）創造社会という流れで捉えており，教師は，知識・スキルを教える teacher（教える人）としての立場から，話し合いを促す facilitator（考えやすくしたり，コミュニケーションしやすくしたりする人）となり，そしてこれからの時代は一緒に創り，学び合う generator（生成的な参加者）という役割を担っていると述べている。これは，幼児期の子どもに関わる保育者にとっても当てはまることではないかと考えられる。「ジェネレーター」とは「ジェネレイティブ・パーティシパント」という言葉を短縮したもので，生成的な流れを促しながらともに創ることに参加するという意味合いをもつ。保育者はジェネレーターとなり，子どもたちの遊びの中に一緒に参加しながら，ともに遊びを創り，楽しみ，考えていくことで，子どもも大人も新たな発見や学びがあり，成長していくことができるのではないかと考える。

教師も一人一人の幼児も主語となるとき，Co-Agency（共主体）の保育が生成されるのかもしれない。教師が幼児と共に創る保育といえるであろう。

今後の課題としては，幼稚園教育要領と小学校学習指導要領の「動詞」を検討した結果を踏まえ，保育所保育指針，こども園教育・保育要領においてはどうか，「動詞」だけでなく，他の品詞にも着目し分析を深めていきたい。

そして，ジェネレーターの役割としての「生成的な参加者」とは何か，保育事例をもとに検討していきたい。

引用文献

- バンヴェニスト，É.（2022）一般言語学の諸問題【新装版】（岸本通夫監訳，河村正夫・木下光一・高塚洋太郎・花輪光・矢島猷三訳）みすず書房。
- ハイコ・ナロック，プラシャント・パルデシ，影山太郎，赤瀬川史朗（2015）現代語自他対一覧表 Excel 版』（<https://wstp.ninjal.ac.jp/resources/>）（情報取得 2023 年 9 月 13 日）
- 樋口耕一（2020）社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して—第 2 版ナカニシヤ出版。

市川力，井庭崇（2022）ジェネレーター:学びと活動の生成 学事出版。

池上嘉彦（1981）「する」と「なる」の言語学：言語と文化のタイポロジーへの試論 大修館書店。

池田浩輔・福田博人（2019）動詞を観点とした中等教育段階における学習指導要領「目標」の分析研究：数学・理科・情報に着目して，日本科学教育学会研究会報告，34(3)，pp.85-88。

池田浩輔・福田博人（2020）日本の次期学習指導要領における科学教育はいかなる特徴を有しているか？：活動を観点とするテキストマイニングによる校種間の比較を通して，日本科学教育学会研究会報告，35(3)，pp.29-34。

池田浩輔・福田博人（2021）日本の学習指導要領における科学教育の特徴について：活動を観点とするテキストマイニングによる校種間比較分析を踏まえて 日本科学教育学会第 45 回年会論文集 pp.605-608。

勝浦千晶，戎喜久恵（2003）『保育になる』ということ 日本保育学会大会発表論文集 pp.768-769。

『幼稚園教育要領解説』における遊びに関する言説の分析。児玉理紗・楠本恭之（2022）『幼稚園教育要領解説』における遊びに関する言説の分析 比治山大学・比治山大学短期大学部教職課程研究 8 pp.144-153。

文部科学省（2018）幼稚園教育要領解説 フレーベル館。

OECD Learning Compass 2030

https://www.oecd.org/education/2030-project/teaching-and-learning/learning/learning-compass-2030/OECD_Learning_Compass_2030_concept_note.pdf
（情報取得 2023 年 11 月 19 日）

中俣尚己（2020）日本語母語話者は本当に自動詞を好むのか？ 自動詞と他動詞の教え方を考える（編者 江田すみれ・堀恵子）くろしお出版。

玉岡賀津雄，張婧禕，牧岡省吾（2003）日本語自他対応動詞 36 対の使用頻度の比較 計量国語学 31 (6)，pp.443-460。

館山壮一，高橋正紀（2021）言語的つながりから見る幼小連携についての考察 修紅短期大学紀要 41 (0)，pp.21-29。

表3 幼稚園教育要領の特徴語に関する幼稚園教育要領と小学校学習指導要領の比較

	幼児	幼稚園	生活	教育	自分	様々	味わう	課程	体験	気づく
小学校学習指導要領 (2926)	15 (0.51%)	9 (0.31%)	283 (9.67%)	84 (2.87%)	127 (4.34%)	32 (1.09%)	28 (0.96%)	28 (0.96%)	37 (1.26%)	66 (2.26%)
幼稚園教育要領 (271)	89 (32.84%)	47 (17.34%)	75 (27.68%)	41 (15.13%)	36 (13.28%)	28 (10.33%)	24 (8.86%)	24 (8.86%)	24 (8.86%)	25 (9.23%)
合計 (3197)	104 (3.25%)	56 (1.75%)	358 (11.20%)	125 (3.91%)	163 (5.10%)	60 (1.88%)	52 (1.63%)	52 (1.63%)	61 (1.91%)	91 (2.85%)
χ^2 値	813.422**	408.418**	79.043**	95.966**	39.176**	109.991**	91.848**	91.848**	72.371**	41.082**

** $p < .01$

表4 小学校学習指導要領の特徴語に関する幼稚園教育要領と小学校学習指導要領の比較

	活動	付ける	指導	身	内容	表現	理解	事項	次	学年
小学校学習指導要領 (2926)	509 (17.40%)	502 (17.16%)	502 (17.16%)	476 (16.27%)	386 (13.19%)	355 (12.13%)	312 (10.66%)	294 (10.05%)	573 (19.58%)	246 (8.41%)
幼稚園教育要領 (271)	45 (16.61%)	10 (3.69%)	10 (3.69%)	7 (2.58%)	25 (9.23%)	22 (8.12%)	10 (3.69%)	18 (6.64%)	16 (5.90%)	2 (0.74%)
合計 (3197)	554 (17.33%)	512 (16.02%)	512 (16.02%)	483 (15.11%)	411 (12.86%)	377 (11.79%)	322 (10.07%)	312 (9.76%)	589 (18.42%)	248 (7.76%)
χ^2 値	0.06	32.447**	32.447**	35.158**	3.139	3.467	12.556**	2.891	29.976**	19.331**

** $p < .01$